happening.

東京プロジェクトスタディ１

わたしの、あなたの、関わりをほぐす

～共在・共創する新たな身体と思考を拓く～

あなたと、共に関わりをほぐす

誰と、いつ、どこで、どんなふうに出会うのか。
日々誰かとすれ違い、出会いや協働の中で、その人らしさに触れ、その場でのわたしがうまれ、関係性の糸を編む。そこに関わりの種がうまれたとき、それを紡いでもいいし、種のままで置いておいてもいい。もしかするといつかどこかで、それは思いもよらない形で芽吹き、また紡がれるかもしれない。

東京プロジェクトスタディ 1
「わたしの、あなたの、関わりをほぐす〜共在・共創する新たな身体と思考を拓く〜」

このスタディでは、「関係性の在り方」に着目し、ワークショップやディスカッションを重ねながら、一人ひとりの身体と記憶、感覚やことばを掴み直すことからはじまりました。常に考えてきたことは、異なる感覚を持つ他者との新たなコミュニケーションの回路を拓くことについてです。

ナビゲーターであるわたしと岡村成美さんは、手話という言語をもちいる両親と音声言語の社会、視覚と聴覚、身体と記号のあいだで、ゆらゆら揺れながら対話し、世界をつくってきました。日々、伝え方を模索していく中で、これまでにもいろんな発見や喜びがありました。家の中で別々の部屋にいても、手話で話している家族の空気の揺れがうるさいほどに伝わってくること。手で話しているとき、その人のもつ記憶が溢れ出てくるように像として視えること。ティッシュや軽い紙、ぬいぐるみを家族の視界に投げて振り向いてくれたときのつながった嬉しさ。

身体や感覚、思考の流れが違う世界で、共に在ろうとするとき、そこには様々な伝え方の発明がうみだされていきます。

スタディ 1 では、10 人のメンバーと共にこの伝え方の発明に取り組んできました。
本冊子は、2021 年 8 月から 2022 年 3 月にかけて、スタディ 1 でうまれた実験・実践を、
この冊子を手に取った“あなた”と拓くための「伝え方の創造ムック」です。

自分とは異なる身体や思考、言葉、触れ方、そのまなざし。
いつのまにか暗黙知となってしまっていることを、軽やかに崩して、ほぐすことから、共に在るための発明に取り組みたい。

あなた自身の身体が何を考え、どう他者と関係を紡ごうとしているのか。
そして想いや思考を届けるためには、どんな方法があるのか。

本冊子に出会った「あなた」と、共に揺れながら、新しい景色に出会えますように。

和田　夏実
スタディ 1 ナビゲーター／インタープリター

この冊子の遊び方

どのページからでもご自由に、パラパラとめくってみてください。そして、気になる「問い」をひとつ選んで、体験してみてください。その「問い」は、あなたの感覚を心地よく、ときには少し違和感を残しながらほぐしてくれるはず。その実感の先で、あなたが発見したことを、冊子に書き込んだり、挟み込んだりして、ぜひ残していってください。その発見が、いつかきっと、あなたと、誰かの、関わりをほぐすヒントになるはずです。

Step1

冊子の中にある「問い」をひとつ選びましょう

Step2

その「問い」を、あなた自身のからだでためしてみましょう

Step3

ためしたことで感じたことや発見を自由につづりましょう。本冊子の「記録ノート」も活用してください。

この冊子の構成

＜身体と思考をほぐす世界の捉え方＞ Workshop

01 ～ 11 に並んでいるのは、４名のゲストと行った４つの Workshop からうまれた問いです。

身体で伝えること、恋について考えること、まちの触れかたを体験すること、世界を創造してみること、

問いを通して世界に触れたとき、どんな景色があなたに届きますか？

＜感覚や発見を書き記す＞ Recording notes

Workshop から『happening.』まで、スタディ１の活動に参与観察的に伴走した記録者の視点が記された「記録ノート」です。

さまざまな感覚世界と出会った時に感じたことを、あなたはどう書き残しますか？

＜新しいコミュニケーションの回路をつくる＞ happening

４つの Workshop をとおして得た発見をもとに、スタディメンバーが自分にとっての関係性の回路を『happening.』という展覧会としてひらきました。衣服や造形、石や紙、声やことば、香りや温度など、さまざまな方法で自分なりの「伝え方」を発明した 10 人の作品の写真とあわせて、スタディ１の経験を振り返りながら綴ったコラムと問いも収録しています。

スタディメンバーの経験をとおして、次に、あなたの中にうまれる happening はどんなものですか？

■ この冊子は、東京プロジェクトスタディ１のワークショップやディスカッション、展示制作など、約半年間にわたる取り組みをもとにつくられた冊子です。QR コードのアーカイブサイトからは、その実践の記録をご覧いただけます。ぜひ、アーカイブサイトと合わせてお楽しみください。

※ 書き手により表記ゆれや空白などが見られるが、原文の表現を活かすためそのまま掲載する。

誰かと出会うこと

そしてそこに

思いもよらない創発の可能性が拓いていくこと

出会いによって

自分の身体が変わり、世界が一変してみえること

関係性の中でうまれ続けるものを、

Workshop

無意識の身体と
手話する思考の身体のあいだで
翻訳を考える

日にち：2021 年 8 月 22 日（日）、29 日（日）

Guest

photo：k.kawamura

南雲麻衣

パフォーマー、アーティスト

平成元年生まれ。神奈川県逗子市出身。３歳半で失聴。７歳で人工内耳埋め込み手術を受ける。文化施設の運営・企画の仕事の傍ら、ダンサー、コレオグラファーなどアーティストとしても活動する。当事者自身が持つ身体感覚（ろう［聾］する身体）を「媒体」に、各分野のアーティストと共に作品を生み出している。また、美術館や子ども向けのワークショップを積極的に行う。

01

30秒前に
自分がした動きを
思い出して
もう一回やってみよう

30 秒前、あなたはどんな動きをしましたか？無意識にした動き、いつもの癖、あなたの手や身体はどんなふうに動くのでしょうか。例えば、5〜6 人でチームを組んで、いざ、ドッジボールをします。どっちが勝つか、一生懸命、無我夢中に勝負をしたあと、もう一回、今度はボールなしでおんなじ試合を再現してみましょう。

外野は誰？

いつ外にでた？

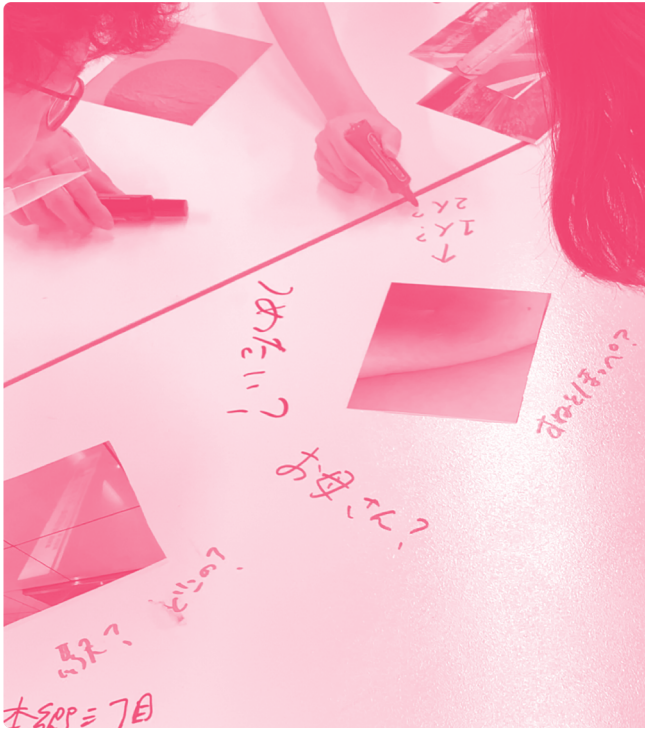
わたしはいつ誰にボールをあてられたんだろう？

その場で起こった経験はみんなそれぞれの視点をかき集めれば再生可能なのでしょうか？はたまたそれは、ほんとうに起こったことだったのでしょうか。

02

なまえのないものを集めてみよう

まちや家、公園などなど、さまざまなところから“なまえのないもの”を採取してみましょう。集め方は、写真を撮るでも、絵に描くでも、言葉にしてみるでもなーんでも。そして、そのなまえのないをどうにか誰かに伝えてみましょう。それは、どうしたら相手の頭の中にも浮かばせることができるのか。身体や手、いろんな方法で、あぁ！とイメージが合致する体験をつくるにはどうしたらいいのでしょうか。なまえを持たないそのものを共有したり、取り出したりする方法を創造してみましょう。



指でちいさなわたしをつくって
まちに出かけよう

03

ピースサインを下に向けると途端に歩く人のようにみえてきます。
ちいさな「わたし」でいろんなところにでかけよう。

Workshop

視覚優位な「恋」を解体する？

ひとめぼれ、恋に落ちる時、一体何に惹かれるのか？
全盲の言葉の探究者と共に「恋」について紐解き探究する。

日にち：2021 年 9 月 12 日（日）、22 日（水）

Guest

藤本昌宏

1998 年大阪生まれ。生まれた時から視覚障害を患っており、現在は全盲である。7 歳から東京に移り住み、小学校から高校までは特別支援学校で過ごす。大学では英米文学や言語学について学び、現在は立教大学異文化コミュニケーション研究科にて、英語教育について研究している。また、学生をする傍ら、文字起こし業務や脚本執筆、ラジオドラマの制作を行なっている。

植物を触察してみよう

04

触察とは、ある物を触ったり嗅いだりして観察する方法です。今、目の前にある植物と、目をつむって対話してみましょう。そこにはどんな景色が見えるでしょうか？触ってみて何を思い出すでしょうか？その香りを嗅いでどんな気持ちになるでしょうか？触っただけで癒される大切な宝物はありましたか？触れるという行為は思ったより暖かいものなのかもしれません。

05

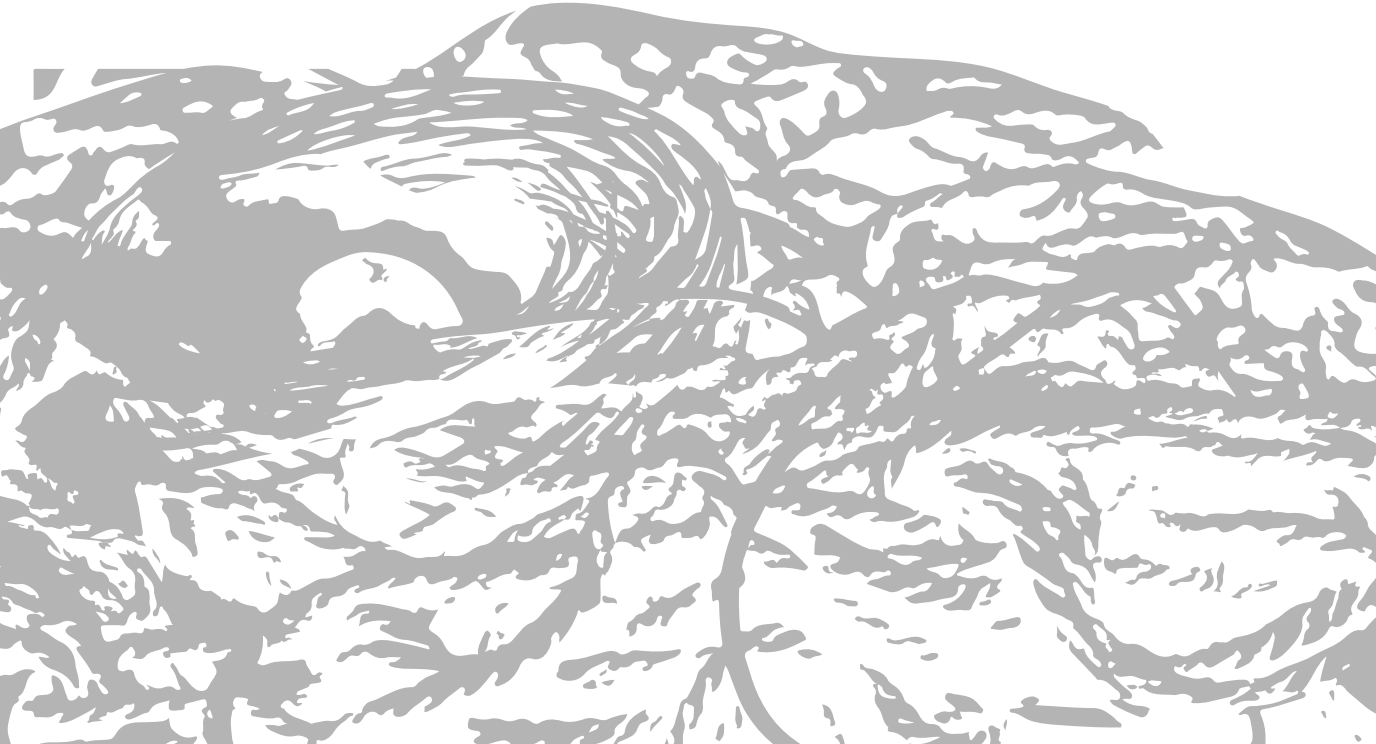
視覚によらない
ひとめぼれについて
考えてみよう

恋に落ちたと自覚した瞬間はあなたにとってどんな時でしょうか？どんな音がしましたか？どんな匂いがしましたか？どんな気持ちになりましたか？

ひとめぼれというのは突然やってくるくせに、いつのまにか心に残って離れなくなる経験かもしれません。あなたは何にひとめぼれしますか？

その瞬間を全身で探ってみましょう。

06 恋にほんとに触れてみよう



あなたにとって恋とはどんなものでしょうか？

美しいものでしょうか？

儚いものでしょうか？

ざらざらしているでしょうか？

もふもふしているでしょうか？

今、目の前にたくさんの何かがあります。形も大きさも香りもさまざまです。それらを使って、あなたの恋を翻訳してみましょう。そして、他の人が翻訳した恋に触れてみましょう。その途方もない探究の先に、恋の瞬間を照らす明かりが見えるかもしれません。

Workshop

身体感覚を通して直の共在をたどる

触覚によるコミュニケーション方法を探り、
他者の身体的境界を超える感覚について体感する。

日にち：2021 年 10 月 10 日（日）

Guest

田畑快仁

触覚デザイナー

1997 年東京生まれ、現在は横浜在住。先天性盲ろう者。第一言語は手話、コミュニケーション手段：接近手話・触手話・指点字・筆談など武蔵野大学で社会福祉を学びながら、盲ろう者だからこそできる社会参加を模索中。趣味はマラソン・旅行・２人乗りのタンデム自転車。

ひもで誰かと繋がって、
自分の思い描く
丸の形を伝えてみよう

07

手ではなく、ちいさなひもで相手とつながる。盲ろうの田畑さんはその状態で並走者と共にマラソンを楽しみます。それではみなさんも、ちいさなひもを探してきて、誰かと一緒にそのひもを持ってみてください。まずはゆっくり揺らします。相手と自分が一体になる瞬間はわかりますか？リズムがズレる時、どんな気持ちになりますか？さて、それでは問題です。

「自分の頭に浮かぶ丸の形を相手に伝えてみましょう」

どんな方法だと自分の頭の中の形を相手に伝えることができるでしょうか？

人差し指で
机や椅子、壁、
何かに触れてみよう
どんなことがわかる？

08

さあ、人差し指を出して、近くにあるものに触れてみましょう。その指からどんな情報が得られますか？田畑さんは、触覚にはアフォーダンスが存在するといいます。椅子を見て座るところを見つけるといった視覚的な情報からのアフォードではなく、触覚のアフォーダンス。いったいどんなものなのでしょう。人差し指で触れているのはたった一部なのに、机の大きさや重さ、その質感、角度などさまざまな情報がやってきます。

「足の裏や白杖で触れ、目的地への方向や道の段差などを知り動く時、ブロックの形によって、止まれ、進め、を認識、理解する。電車の手すりやつり革に触れることで、間違えずに目的の電車に乗ったことを知る、手すりの形は、私鉄とＪＲなど電車の種類によって異なっています。サポートを受けなくても、ひとりで動くことができるのはアフォーダンスのおかげかもしれない。思わず触れてしまうものに助けられている。」

（田畑快仁：ワークショップ内での言葉より）

09

身体の記憶、あなたの身体の中に広がる宇宙には
どんな感覚があるだろう？

目をつむって、鞄を持つ時の動きをしてみてください。鞄がその場にな

かったとしても、そして見えていなかったとしても、わたしたちはその

持った時の動きを再現することができます。実のところ、わたしたちの

身体にはさまざまな触覚や動きの記憶が積み重なっていて、それは、同

時にあなただけが触れた世界でもあります。触手話というコミュニケー

ション方法は、手話を起点に、相手の手と自分の手を重ねて、その動き

を共に再生するようにして伝える方法です。あなたが最近触れた、あな

た自身の動き、その世界の広がりを誰かと一緒に再生してみよう。

Workshop

新しい世界を創造する

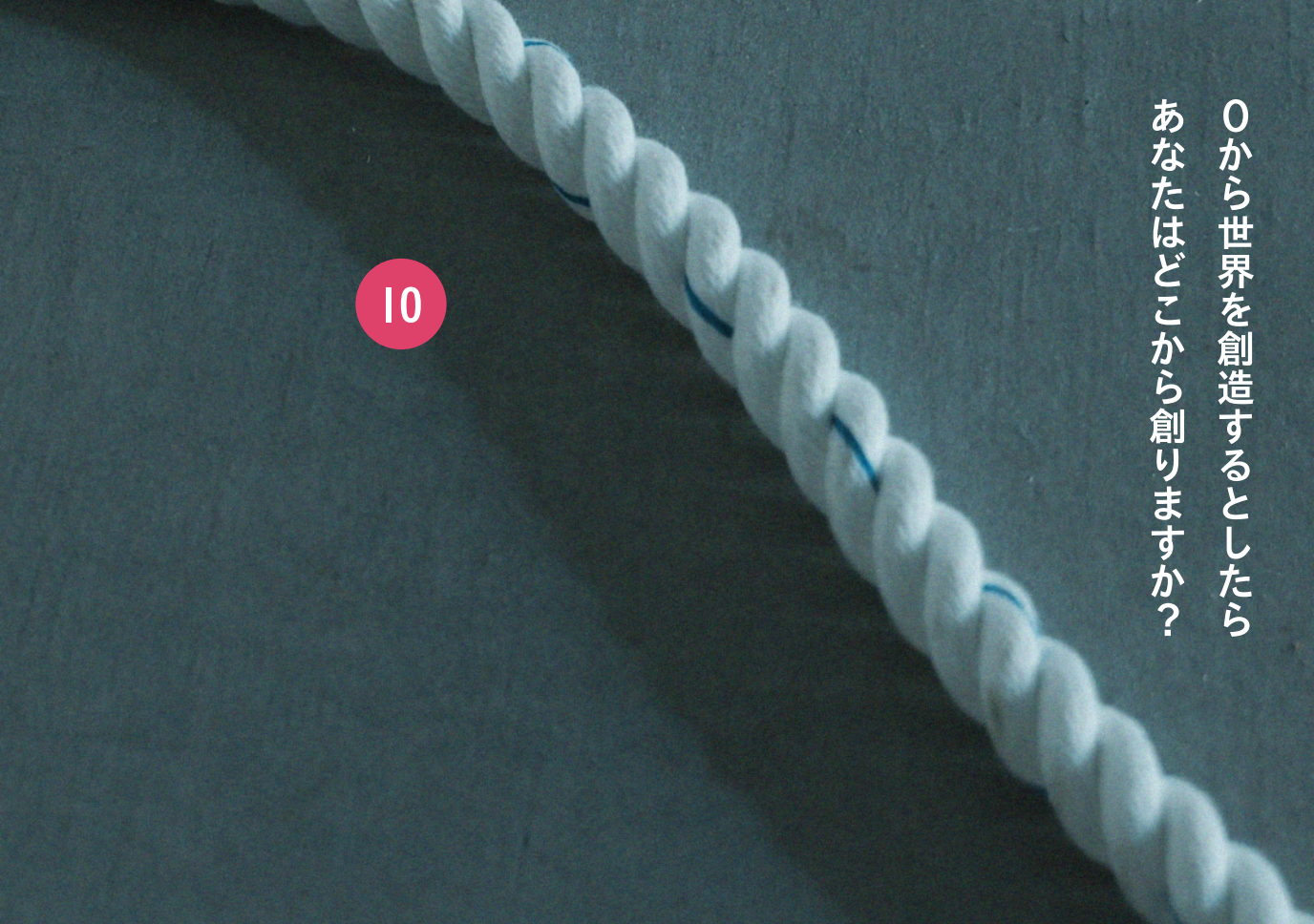
ルールを変えて、世界を創造するとしたら。
テーマや感覚、新しい身体やルールからどんな世界がうまれるだろう。

日にち：2021 年 11 月 14 日（日）

Guest

Takuto Ohta

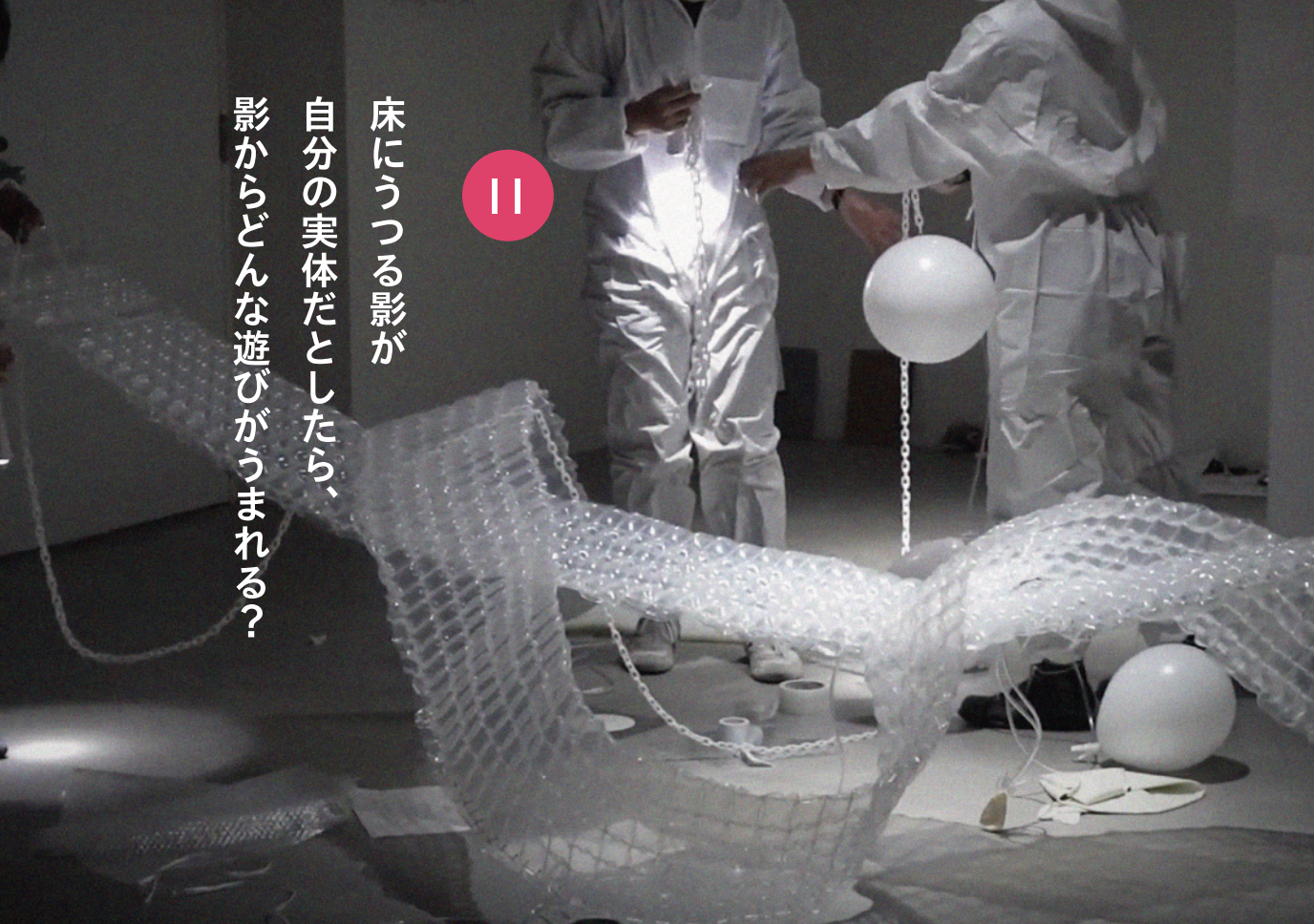
平成５年生まれ。フランス / パリ出身。生命活動とものづくりに通ずる「分解」と「生産」のプロセスに焦点を当て、新たな人とモノの関係性を生み出すきっかけをデザインしています。領域に縛られない多元的で流動的な思考を心がけています。東京藝術大学デザイン学科 第９研究室 修了。現武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科インテリア研究室 助手。



10

0から世界を創造するとしたら
あなたはどこから創りますか？

もしも、この世界を０から自由に創れるとしたら、あなたはどこから創り始めますか？なにが、どこにすんでいる？言語？空間？伝達手段？移動方法？それらはいったいどんなふうになるのでしょう。わたしたちが今すんでいるこの世界はさまざまな人の試行錯誤によってできた世界。それは、壮大なるフィクションかもしれません。もしも、新しい世界を創れるとしたら、どんな世界を創りますか？



II

床にうつる影が
自分の実体だとしたら、
影からどんな遊びがうまれる？

あなたは今から影の國の住人です。ここでは今までのあなたは意味をなさず、床にうつるあなたの影があなた自身の実体となります。この世界では光が非常に大切なものであり、光との関係性の中でそれぞれが存在を保っています。影が自分自身だとしたら、あなたはどんなふうに移動しますか？この世界では、どんな遊びがうまれるでしょうか？

Column

「大丈夫です、まだ 8 月27日の 36 時という世界にいます」

あるワークを実施する前に、メンバーから写真をもらう必要があった。その締切が 8 月 27 日だった。その締切に間に合わない人もいて、「現実には存在しない 36 時」という概念を発動して、送ってもらうのを待った。受け取る側が 36 時にいるのであれば、締切を破ることにはならない。時間が、送り手と受け手の間でやわらかくなると言える（のかもしれない）。

そもそも締切は誰のためにあって、なぜ守らないといけないのか、そもそも守る必要があるのかという問いは忘れずに閉まっておくけれど、36 時的な発明が、このスタディにまつわる場には詰まっていた。

いや、違う。36 時の場合は、その次の日にあったはずの 0 時から 12 時は失っている。もしくは、受け取る側に課せられている締切までの時間が削られている。その繰り返しが、「受け取りたいと思えなくなること」へつながり、「受け取ってもらえないなら、伝えたところで意味がない」になっていくのかもしれない。

このスタディのメンバーは、きっと、そういった連鎖から逃れる方法を探していた。あくまで自分の身体で感知していることを起点にして。

どの人も、自分の身体に起こっていることは決して手放さず、自分と他者の間に「共に育てていくであろうなにか」を置いた。その痕跡が『happening.』やこの冊子、アーカイブサイトに残っている。

このスタディで出会った人がこれから育てるものやそれぞれの日々のふるまい、実験の積み重ね。それらがある文化になり「締切」や「36 時」的な発想を構造的な課題からほぐすきっかけにもなるのだろうと、予感しています。

木村和博

スタディ 1 運営／劇作家・編集者・ライター

Recording notes

スタディ 1 記録ノート

き - ろく【記録】
のちのちに伝える必要から、事実を書きしるすこと。また、その文書。特に史料としての日記・部類記の類。
（広辞苑 第六版より）

「内側からの記録」を依頼され、記録担当としてスタディ 1 の伴走を始めたのが 2021 年 8 月。主な仕事はアーカイブサイトに掲載する記録記事を作成すること。これは、メンバーと一緒にさまざまな感覚世界と出会う一方、記録者でもありつづけた「わたし」の記録ノートです。
4 枚をつなぐと大きな地図になります。あなたならこの道のりをどのように歩いていきますか？

阿部健一

スタディ 1 記録担当／ドラマトゥルク

※アーカイブサイトに各回のレポートを掲載しています。
詳しい記録はそちらをご覧ください。
※記録ノートに記載されている実施日は、アーカイブサイトの内容と連動しています。
https://www.tokyoprojectstudy.jp/2021/study1/

（記録ノート紙面構成　齋藤優衣）

8 月 18 日　第 1 回
声と文字で／に出会う（カメラをつかわない顔合わせ）

01 02 03
8 月 22 日・29 日　第 2 回
無意識の身体と手話する思考の身体のあいだで
翻訳を考える　（ゲスト：南雲麻衣さん）

04 05 06
9 月 12 日・22 日　第 3 回
視覚優位な『恋』を解体する？
（ゲスト：藤本昌宏さん）

9 月 13 日　2019 年度のスタディ 1 記録担当の高須賀さんと江東区を歩くなかで、わかっていない自分に気づく

9 月 19 日　過去の東京プロジェクトスタディ記録記事を通読

1.「あなた」と出会う

ワークショップという設えでゲストと出会い、さまざまな感覚世界に触れるまたそれぞれの世界を通してメンバーを少しずつ知る

01 ～ 11 のカードを通してその世界に触れることができます

Recording notes

スタディ 1 記録ノート

このドキュメントブックに触れた「あなた」の記録を
自由に書いてみてください。
どんなつかい方でも構いません。

第 1 回
声と文字で／に出会う（カメラをつかわない顔合わせ）

01 02 03

第 2 回
無意識の身体と手話する思考の身体のあいだで
翻訳を考える　（ゲスト：南雲麻衣さん）

04 05 06

第 3 回
視覚優位な『恋』を解体する？
（ゲスト：藤本昌宏さん）

1.「あなた」と出会う

ワークショップという設えでゲストと出会い、さまざまな感覚世界に触れる
またそれぞれの世界を通してメンバーを少しずつ知る

01 ～ 11 のカードを通してその世界に触れることができます

2.「あなた」の話を聞く／「わたし」の話をする

わたしたちもまた、異なる感覚世界を生きる「あなた」たち
焚き火を囲むようにして、わたしの・あなたの世界の話をする

07 08 09

10 月 10 日　第 4 回
身体感覚を通して直の共在をたどる
（ゲスト：田畑快仁さん）

9 月中旬のある日。数年前の東京プロジェクトスタディ記録担当と作品をつくる機会があり、歩きながら記録について話すなかで、スタディ 1 の進んでいる世界や土台になっている言語、文脈を、わたしはかなりわかっていないと気づいた。はじめは、ナビゲーターメッセージや個々のワークショップから想起した知識や記憶をつなぎあわせてこのスタディのまなざしをわかろうとしていた。だけど、既知の経験から理解するのではなく、まだ知らないものとして向き合おうとこのとき思った。
「触察」の感触を残したからだで、「歩くこともまた触覚」と考えながらわたしは歩いた。フィールドワークは都市を触察しているのかもしれない、と、体験はわたし自身のまなざしをじわじわ変えていた。

10 月 31 日　第 5 回
話を始める、耳を傾ける

10 11

11 月 14 日　第 6 回
新しい世界を創造する
（ゲスト：Takuto Ohta さん）

11 月 23 日
「クリスチャン・マークレー
トランスレーティング［翻訳する］」を見に行く

12 月 5 日・12 日　第 7 回
つくりたいものをときほぐす

11 月、東京都現代美術館で開催されていた展覧会（「クリスチャン・マークレー トランスレーティング［翻訳する］）で物体としてのレコード盤がつかわれた作品を見て、レコードの原理が傷跡とその再生であるならば、あらゆる傷跡に再生の可能性を見る「メタファーとしてのレコード盤」という視点がありえるんじゃないかと考える。すると石や衣服やランドスケープがレコードに、からだが針になる可能性で満ちてくる。触覚の世界と創作が接点を持ち始める。

2.「あなた」の話を聞く／「わたし」の話をする

わたしたちもまた、異なる感覚世界を生きる「あなた」たち
焚き火を囲むようにして、わたしの・あなたの世界の話をする

07 08 09

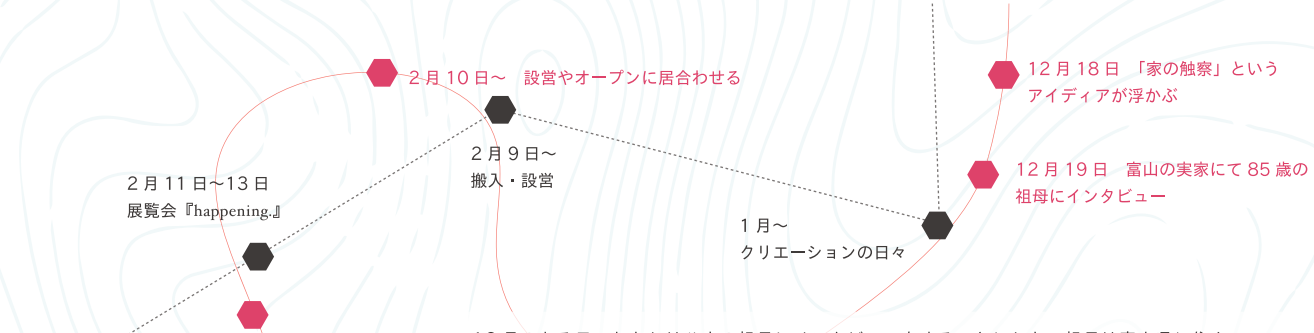
第４回
身体感覚を通して直の共在をたどる
（ゲスト：田畑快仁さん）

第５回
話を始める、耳を傾ける

10 11

第６回
新しい世界を創造する
（ゲスト：Takuto Ohta さん）

第７回
つくりたいものをときほぐす

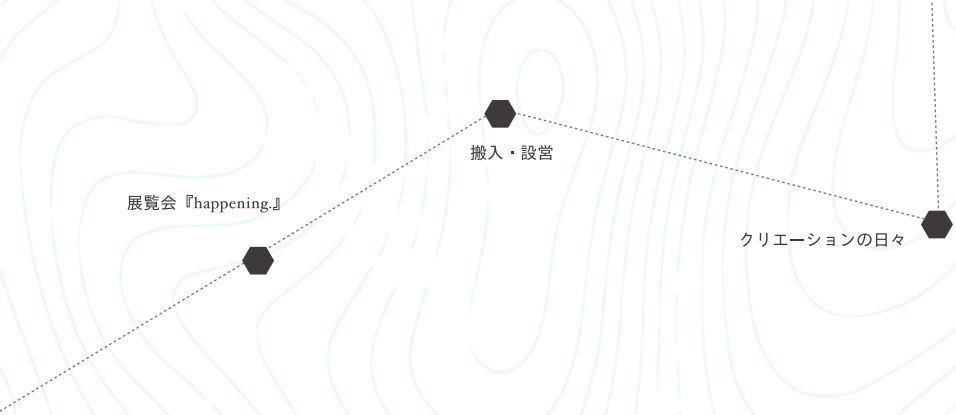


12月のある日。わたしは父方の祖母にインタビューをすることにした。祖母は富山県に住んでいて、認知症が進んでいる。ひとり暮らしの継続は無理があり、両親とわたしは家の片付けやさまざまな手続きのために定期的に富山に通っていた。「もうつかわない」ものをばさばさと捨てていく。生活の痕跡を「きれい」に処分する傍らで、わたしはレコーダーとカメラをセットした。祖母の人生の話を聞き、雪の降る庭や古びた家具を解体する映像を撮り、年代物の郷土料理本や祖父のつけていた家計簿などを祖母の了解を得てもらった。

祖母と向き合うことは、祖母と父の関係の間に自分の身を置くということだった。同時に、家とわたしの関係に触れることでもある。「家の触察」とひっそり名付けたこの取り組みをどう進めていくかまだ決めていない。だけどインタビューの翌日、古い家があった場所を見に行くか？と父はわたしを誘った。すでに何かが動き始めているのだと思う。

3.「あなた」に届けるために手を動かす

「わたし」が「あなた」との間に生み出したい瞬間、伝えたい景色のため、
考え、対話し、手を動かし、そして場をひらく



3.「あなた」に届けるために手を動かす

「わたし」が「あなた」との間に生み出したい瞬間、伝えたい景色のため、
考え、対話し、手を動かし、そして場をひらく

3月23日
本冊子完成

スタディ１
メンバー募集ページ

展覧会最終日の２月13日。記録記事のため、メンバーに短いインタビューをした。質問は、あなたが起きてほしいと思ったhappeningと、８月からの過程で印象的だった瞬間について。それは体内で発酵したひとりひとりの半年に触れる瞬間で、ことばと、ことばの手前の芳醇さにくらくらした。ここで出会った景色が「わたし」たちと結びつき、さらにそのひとつひとつがスタディという場で乱反射して、最早ひとりのものでなくなっている。そのなかにいたのだろう、記録者の「わたし」も。

２月が終わる。メンバー募集のテキストから浮かぶイメージが変化していることにはっとする。共在、共創、かかわり、ほぐす、コミュニケーション、言語、伝える、表現・・・。これらのことばが「わかった」わけではない。だけど、少なくとも手元にはいくつかの「用例」がある。それはあくまでこの場限りの用法かもしれない。でも「わからない」の先にある「こうかもしれない」や「こうであるといい」の手がかりになる気がする。
この「わからなさ」は希望であり、課題である。「スタディ１の用語集」を記録の成果とするアイディアもあったが、それは見送った。でも、2022年２月の置き土産にひとことだけ書き留めてみる。

かん－かく【感覚】
身体が受け取る、あるいは受け取ったように感じた刺激によって感性がさざめき立つ、そのありよう。

２月22日　「スタディ１記録ノート」の原稿を書く

２月25日・３月１日
『happening』をふりかえる

３月６日
最後の活動日

4. 振り返る、記録をする

みちのりをことばにして、いつかの「あなた」や「わたし」に向けて書き残す
気がつくとまた始まっている

スタディメンバーのカードからひとりひとりの問いに触れることができます

本冊子完成

『happening.』をふりかえる

4. 振り返る、記録をする

みちのりをことばにして、いつかの「あなた」や「わたし」に向けて書き残す

気がつくとまた始まっている

スタディメンバーのカードからひとりひとりの問いに触れることができます

最後の活動日

happening

あなただけの新しい
コミュニケーションの回路をつくろう。

ちいさい頃に考えていたことや、わたしだけのなまえのない遊び。不思議と惹かれることや自分が心地いいと思うことを最大化させて、あなただけのコミュニケーションの回路をつくってみよう。声や指、石、粘土、新しい遊び、時間の重なり。どんな方法で、共に在ることができるのか。どんな問いを共有するのか。新しい関わりの在り方を探して、誰とどんなことをしてみたいですか？

happening.

会期　2022 年 2 月 11 日（金・祝）～ 2 月 13 日（日）
　　11:00～19:00
会場　BaBaBa 〒161-0033 東京都新宿区下落合 2-5-15-1F
主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

東京プロジェクトスタディ 1「わたしの、あなたの、関わりをほぐす～共在・共創する新たな身体と思考を拓く～」

「あなただけの新しいコミュニケーションの回路をつくろう。」

2021 年 12 月、この問いからスタディメンバー 10 人の制作がはじまりました。「関わりをほぐす」ことをテーマにそれぞれがつくることを通して発見を繰り返し、2022 年 2 月 11 日〜 2 月 13 日に『happening. | 東京プロジェクトスタディ 1「わたしの、あなたの、関わりをほぐす」展覧会』を開きました。そこでは、さまざまな来場者と共に関わりをひらく時間と場がうまれました。

※QR コードより、展覧会の開催概要などご覧いただけます。

向かい合い、視覚的にコミュニケーションをとるためには、相手側から見える面や、文字の反転・流れる方向などに留意しなければなりません。

本作は、手を動かしたり、角度を変えて見たりして、対面時にどのような現象が起こるのか / 在るのかを体感しながら、その面白さや不思議さを分かち合うための場として制作しました。

わたしとあなたの間にある " 反転 " とは？

以下は、会期中に会場にて口頭で説明していた内容を再現したものです。

「" 反転 " をテーマに制作をしました。作品は 3 つのパートに分かれていて、ガラス面と、簡易ベッドで仰向けになって地図を見ていただくものと、あと、壁に写真を 20 枚ほど貼っています。

人と人とが向かい合ったときに、たとえば文字を相手に伝えようと空中で普通に字を書くと、相手には鏡文字に見えてしまうこと、見る見られるの関係の間に反転という現象が存在することが気になっています。この現象を身体的に、実感を持って知っている方は意外と少ないのではないかと考えて、ペンを使って実際に反転を体感いただける場としてガラス面をしつらえました。

次に、こちらは BaBaBa の周辺地図を透明フィルムに印刷したものです。ベッドに横になって、この地図を裏側から見ていただきます。文字や図は反転して見えます。地図は両手で眼前に広げているイメージで水平に、かつ実際の方角に合わせて吊りました。ベッドも地図に合わせて北が頭にくるよう配置してあります。

一般的に地図は、上から見下ろすことを前提に作られていますが、それを裏側から見上げてみたらどんなことが起こるのか、みなさんにも体験していただきたくてこの装置を作りました。

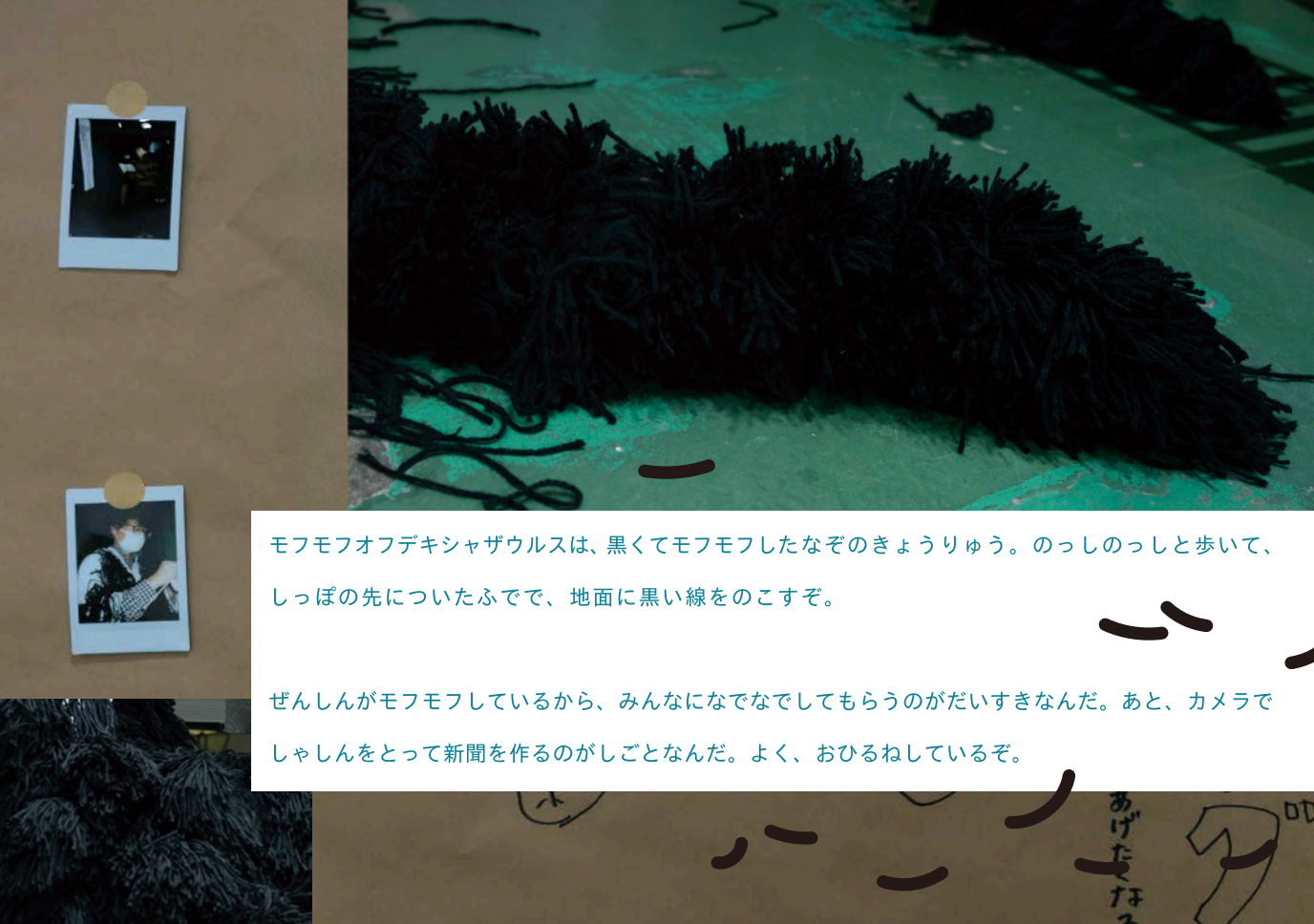
体験された方の多くは、地中に埋まっているような感覚になった、自分の上に建物や道や人が乗っているように感じた、などとおっしゃいます。普通の地図が鳥の目ならば、この地図は蟻の目だとおっしゃる方もいます。

体を寝かせることで、東西と左右の対応関係が反転することも重要です。右が東・左が西だったものが、右が西・左が東になります。普段から地図を見慣れている方ほど、地図を見下ろす身体感覚が強く残って、方向の逆転に戸惑うようです。

最後に壁の写真ですが、これは、わたしが気になった反転を集めたものです。たとえばこれは水面に映る反転、これは天球儀と呼ばれるものです。気になる写真がありましたら教えてください、ご説明させていただきます。」

田中有加莉

現代美術、グラフィックデザイン



モフモフオフデキシャザウルスは、黒くてモフモフしたなぞのきょうりゅう。のっしのっしと歩いて、しっぽの先についたふでで、地面に黒い線をのこすぞ。

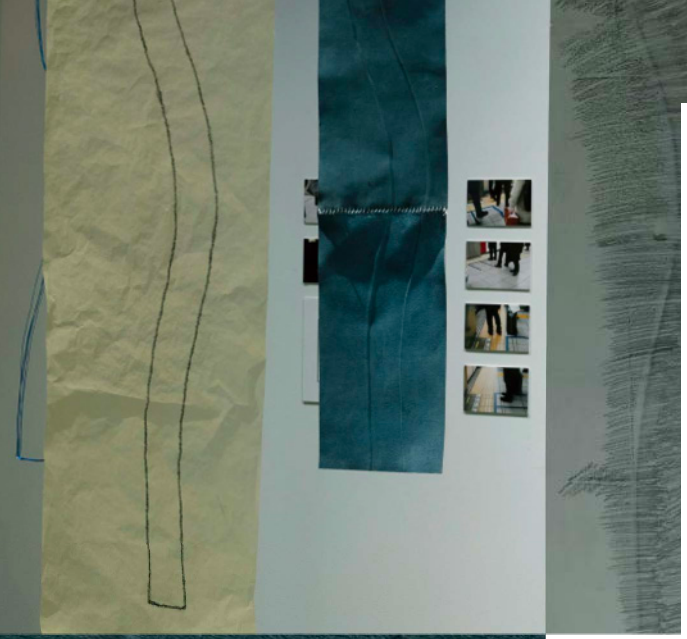
ぜんしんがモフモフしているから、みんなになでなでしてもらうのがだいすきなんだ。あと、カメラでしゃしんをとって新聞を作るのがしごとなんだ。よく、おひるねしているぞ。

はじめまして、ぼくの名前はモフモフオフデキシャザウルスです。名刺もあります。どうぞ。モフモフ新聞という新聞をつくるおしごとをしています。
「……すごくモフモフですね。」
そうでしょ。よくできた尻尾が一番の自慢です。
「ホントだ！　尻尾もある！」
えへへ、さわってもいいですよ。
「なんでモフモフしているんですか？」
それはみんなになでなでしてほしいからですよ。
「どうして黒なんですか？」
それは、黒が一番、見た時にびっくりすると思ったからです。
「確かに、会場に入った時、床に黒い毛が散らばってて気持ち悪かった。」
すみません。あとで片付けます。
ところで、モフモフ新聞では「今日のハプニング」というコーナーで、あなたの身のまわりに起こったハプニングをあつめているのですが、今日、何か起こりましたか？
「うーん……。今日は、寝坊して十時に起きてしまいました」
そうだったんですね。じゃあ、記事にさせていただきます。カキカキ。今日……は、寝坊……して……寝る系のハプニングが多いんですよ。寝過ぎたとか、寝落ちしたとか。
「そうなんですね。」
取材協力ありがとうございます。モフモフ新聞には他の人のハプニング、モフモフ漫画などもあるので、ぜひ見て下さいね。
「はい」
ぼくは、つかれてしまったので昼寝しますね。
「あ、はい。」

「あの時、モフモフした生き物は何をしていたのか？」

「あ、ザウルスが昼寝してる！　かわいい～」
うーん。重い、つかれた。
「ザウルス、お仕事は？」
ちょっとつかれたから昼寝させてくれ～
「いいよ～」

大塚拓海
学生



私があなたに届くころにはあなたになっていて

あなたが私に届くころには私になっていて

近づかない身体と

近すぎる心と

気づいたら残っている

私の跡があなたに

あなたの跡が私に

それでも

私があなたと知り合えたことを

沢山のあなたと知り合えたことを

あなたの跡はどこに残っていますか？

スタディが進むにつれて、どんどん分からなくなっていった。分かり合うことが分からなくなっていった。分かり合うことを探しに来たはずだったのに、分かり合えないことばかりが分かってきた。

私が分かっていると思っていたものは、実は私の中にしかなくて、あなたが分かってほしいと願うものは、あなたの外に出ることができずにいる。口で、手で、指で、私が伝えても、耳で、目で、背中で、受け取るあなたに、どれほど届いているのだろうか。

ある日、歪みを見つけた。それはひとの跡だった。そこに至るまでの、あるいはそこから始まる、ひとりひとりの物語を分かることはできないが、分かることのできない沢山の物語が交わって生まれたその歪みを見つけることはできた。

跡の跡を残した。それは繋がることでもあった。分かり合うことのない沢山のひとと沢山の時間が、分からないままに私と繋がった。落とされていった沢山の気持ちは、分からないけれどもそこに残された。私が残した。

そして、拓本の筆跡が私の指で滲むとき、私の指もまた筆跡の黒鉛で黒ずんでいる。靴底が階段を削り取るとき、階段もまた靴底をすり減らしている。あなたが私に触れているとき、私もまたあなたに触れている。跡をつけることは、跡をつけられることだった。

分かろうとしなくてもいいのかもしれない、ただ繋がっていた跡さえ残っていれば。誰かがきっと見つけてくれる。私がいつか見つけに行く。

二瓶雄太

ヒト

気付かぬうちに　むすんでいたり

はたまた　ほろっ　とほどけたり

蝶々結びのつもりでも　実は輪っかが一つだったり

ことばも　こえも　ちがうから

それぞれの物語があるから

がんじがらめになったとしても

ほつれて頼りなくなったとしても

もう　むすび直せなかったとしても

わたしたちは　今を生きる

可能性の糸をたずさえて

あなたは、どんなときに「つながり」を感じますか？

会話の中で、寂しい物足りなさを覚えることがあります。相手の発する言葉は確かに私の辞書にあるのに、私の身体をスーッとすり抜けて行ってしまうのです。反対に、私の言葉が相手の目の前でボトっと落ちてしまうのを目の当たりにすることもあれば、帰り道でようやく気づいて後悔することもあります。そもそも私は、言葉を言葉として素直に受け取ることができず、実際にはないかもしれない本音を探ろうとしてしまうことも多いです。こういうときに、「つながっていない」と私は感じます。

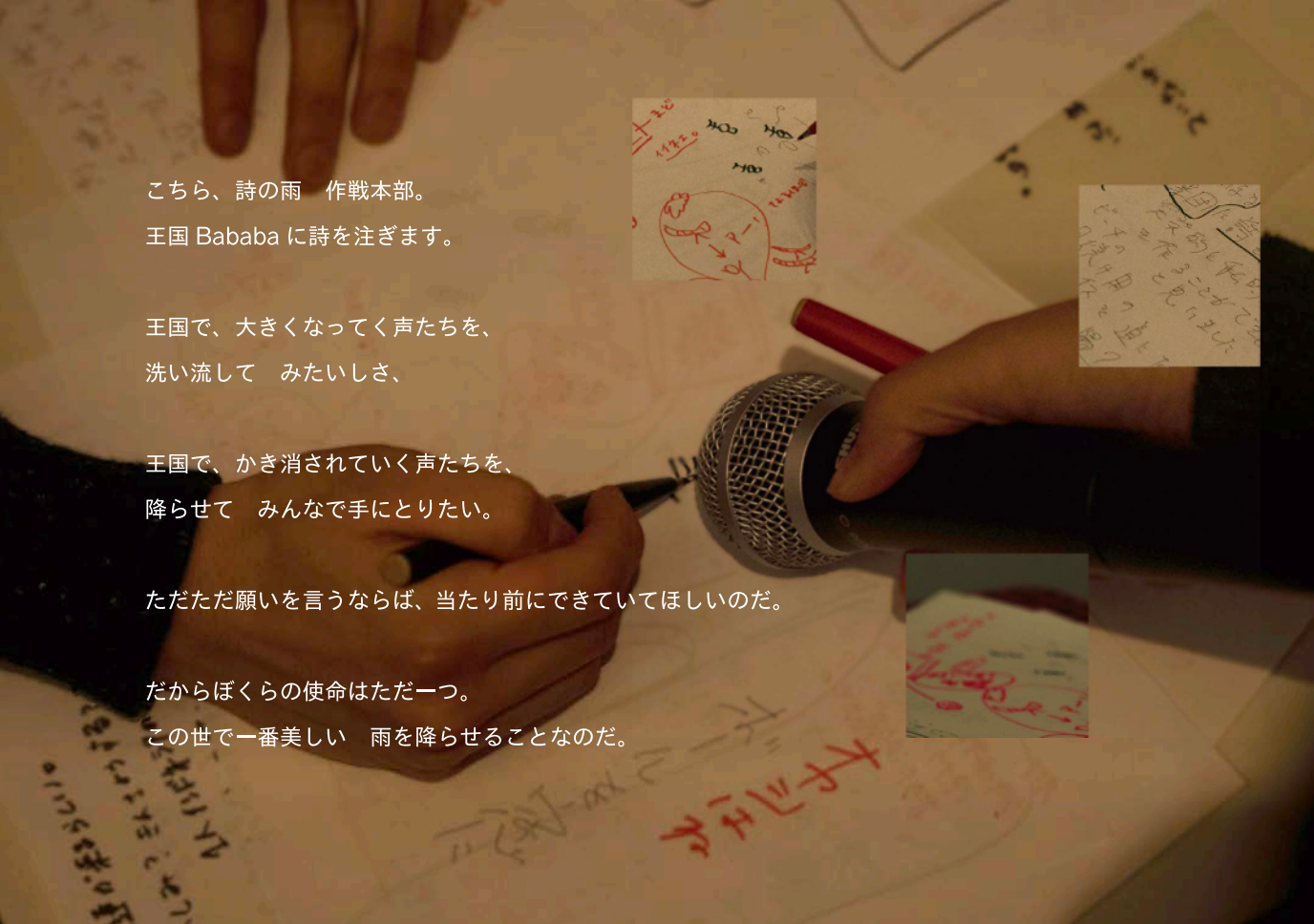
スタディでは、メンバーのみんなと多様なコミュニケーション方法を試しました。冬眠していた感覚たちを研ぎ澄ませて、身体で対話しているようでした。私が感じていた違和感は、言葉の力を信用しすぎていたことが原因かもしれません。そして言葉に限らず、肩書きや目に見える情報などに影響されて、わかったつもりで取りこぼしているものがあることにも気づきました。

私が「つながり」という言葉で表そうとしていたものは、共通言語あるいは感覚の共有と言い換えることができるかもしれません。その前提として、相手に対する興味や意識が必要であると考えた私は、それらを生み出しうる装置を作りました。それは、言葉を使わないことをルールに、五感に焦点を当てるものとなりました。

もちろん、普段私は言葉によるコミュニケーションを主としているので、それ自体を否定しようとは思いません。ただ、時には黙って真っ直ぐ目を見たり、時には目を閉じて相手の存在を感じてみたりするだけで充分、あるいは、より深く「つながる」ことができると信じています。

柳原実和

大学生



こちら、詩の雨　作戦本部。
王国 Bababa に詩を注ぎます。

王国で、大きくなってく声たちを、
洗い流して　みたいしさ、

王国で、かき消されていく声たちを、
降らせて　みんなで手にとりたい。

ただただ願いを言うならば、当たり前にできていてほしいのだ。

だからぼくらの使命はただ一つ。
この世で一番美しい　雨を降らせることなのだ。

あなたは目の前にいる人のことで信じていないことはありますか？
もしあるなら、どうしてあなたは信じたくないのですか？
その手で握りしめているものは一体なんですか？

わたしについて

対等にいろいろなことを話した。

いろいろな実験をやった。

相手の言っていることは基本意味わかっていなかった気がするけど、

想像するのも、一緒にいる時間もとてもとても楽しかった。

別に「分かり合えなくても」いいかもしれないとはじめて思った。

別に共に在ることは難しいことではないとも思った。

その成果発表は通じる人には通じた。

だけど、大事な人に通じなかった。

僕たちは偏ったことばを使っていたのかもしれない。

手ばなして相手に委ねることも大事だけど、

手ばなすとき、僕は目の前にいる人の

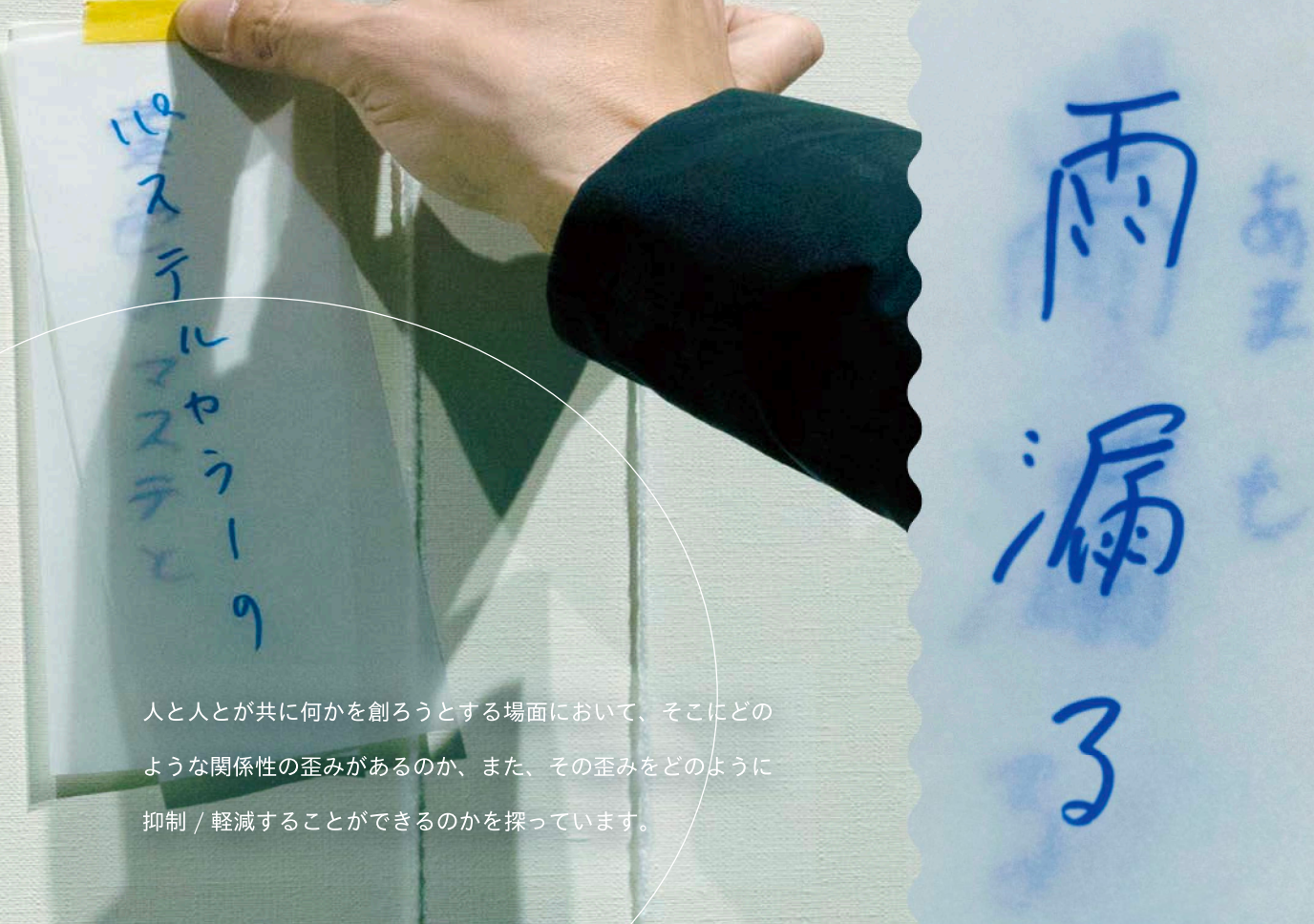
何を信じていて、何を信じていないのか

向き合いたいと思いました。

そして、今なら向き合える気がします。

伊藤悠希

まだない。



人と人とが共に何かを創ろうとする場面において、そこにどのような関係性の歪みがあるのか、また、その歪みをどのように抑制 / 軽減することができるのかを探っています。

共創の場を共創するとは？

わたしは、一人でよりも複数人で作った方が、作品は面白くなると思っています。複数の意見が集まると創作の視野が広がったり、よりよい方向への修正が促されたりします。人は、自分では思い至れないような発想や展開を期待して、他者と共に創ろうとするのではないでしょうか。

共創において、グループ内のパワーバランスは重要な問題となります。特定の人物に力が集中した場合、それは、メンバーの自由な意見の表出を妨げる可能性があるからです。

特に気をつけなければならないのは、声の大きさや年齢、会話における瞬発力の有無などで決まってしまうような力関係です。空気のようなそれは、意識して排除しなければ、いつの間にか場を支配してしまいます。

共創チームでは、それらを関係性の歪みと捉え、その抑制 / 軽減の方法を探ってきました。『上書き短歌』は、その過程をひらくために議論の一部を具現化したゲームです。

お互いの考えを尊重しながらも、意見を言い合い、よりよいクリエイションのために全員が思考する ── そんな共創の場を共創することを、わたしたちは目指しました。（田中）

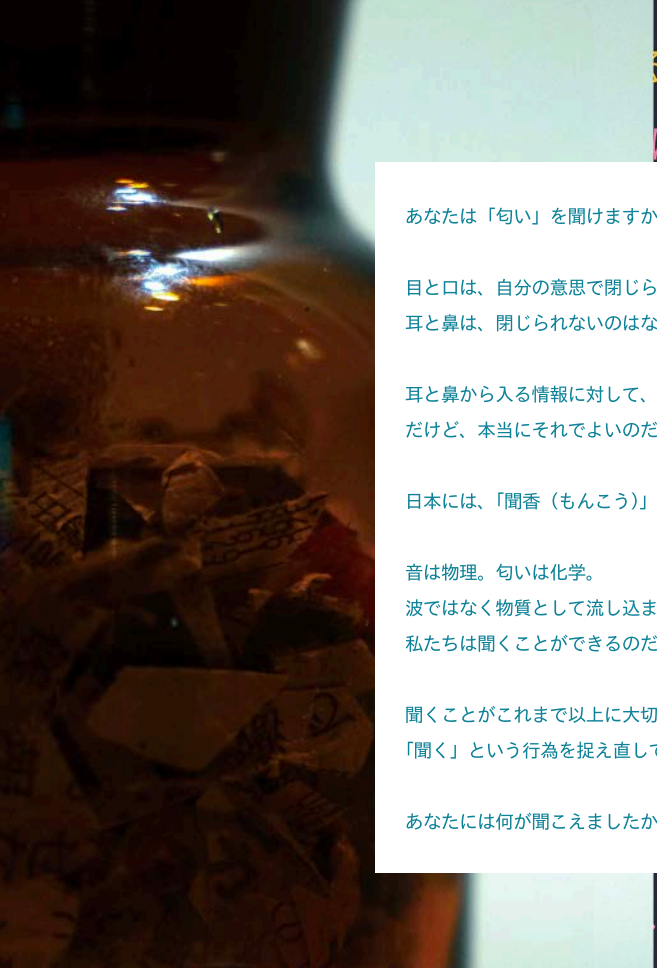
参加者それぞれの世界の捉え方が異なる中、「言葉」は誰しもが共通して利用できる媒体であるという仮説から、「言葉」だけで成立する創作の場として『上書き短歌』は生まれました。happening. では、「言葉」の持つ優れた寛容性や柔軟性に驚くこととなりました。

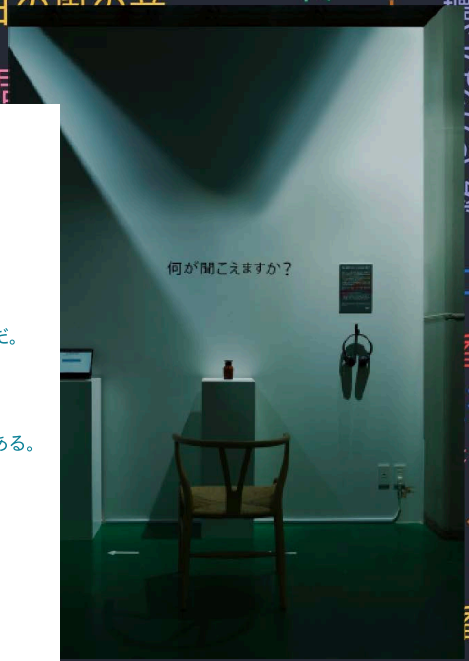
相手の言葉と自分の言葉がキャンバス上で出会い、想像もできないような関係を築きます。言葉たちは上書きされる度に新たな関係性へと移り変わり、その変化とともに情景もまた流れていきます。貼り付けられた三十一文字は正解のない多様な解釈に開かれているがゆえに、果たして隣の人と同じ情景を見ているのか、誰にもわからないまま進んでいきます。

初対面にも関わらず臆することなく創作に参加できたのは、その場が参加者の関係性をフラットに保ったからというよりも、むしろ積極的に関係性の変化を受け入れたからかもしれません。言葉も、人も、歪んではいるものの決して固定化されることのない関係性の中にいたのではないでしょうか。（二瓶）

共創チーム（伊藤悠希、田中有加莉、二瓶雄太、柳原実和）

※共創チームは、「フラットな関係性」を議論の起点として、共に創ることを考えたスタディ 1 メンバー有志の集まりです。





あなたは「匂い」を聞けますか？

目と口は、自分の意思で閉じられるのに、
耳と鼻は、閉じられないのはなぜだろう。

耳と鼻から入る情報に対して、私たちはいつも受動的だ。
だけど、本当にそれでよいのだろうか。

日本には、「聞香（もんこう）」という伝統的な遊びがある。

音は物理。匂いは化学。
波ではなく物質として流し込まれる匂いという情報を、
私たちは聞くことができるのだろうか？

聞くことがこれまで以上に大切な時代だからこそ、
「聞く」という行為を捉え直してみたい。

あなたには何が聞こえましたか。

どうすれば、私たちは「聞く」ことができるのだろう？

私は以前、ライターをしていたが、次第に文章以外のメディアでも表現したいと思うようになり、今回、「言葉」以外の「身体」で感じられるなにかをつくりたいと切望していた。そんな私にとって、音のない世界を聞いたり、手で会話したり、触ってモノを観たりするワークショップは、私の身体に小さなショックの数々を与えてくれた。

最終的に形にしたのは、「聞く」という行為である。振り返ると、スタディの初回、画面オフにした Zoom ミーティングの感想を、次のように書いていた。

“画面オフの Zoom での「初めまして」は楽だった。普段は自分の「顔色」を考えてしまっているからだ。私、気が付かないと、眉間にシワをよせていることが多々あるらしい（苦笑）。だから、そのことを気にしなくてよかったのが、楽だった。でもここだけの話、ラジオ感覚で聞いていて、ふと違うことを考え出してパソコン上で別の操作を始めてしまったときもあった。きっとこれは私だけではないはず（と信じたい）。普段、面と向かっても、相手の話を本当に「聴いている」かは、実はわからない。返答を考えてしまい、相手のことばを耳に流し込んでいるだけかもしれない。ちゃんと味わっていないかもしれない。”

他者の声や自分自身の身体の声を、実は聞けていないのではと感じたことから、全身で「聞く」力を取り戻す体験をつくりたいと考えはじめた。私が元々テーマにしていた「食」と関連して、食材の声を聞く実験から始め、最終的には日本の伝統文化である「聞香」からインスピレーションを得て匂いを用いた。デジタル化・情報化の時代だからこそ大切にしたい「言葉」にならない「ことば」を想起させるメディアだからだ。

“「深く聴くこと」は、「味わう」のと同じで、全神経を集中しないといけない行為だ。私はこれから、誰のどんなことばと出会い、味わうことができるのだろう。世界の食巡りのように、ことば巡りも楽しもう。”

初回に書いた感想のつづきだ。これからも「聞く」ことを続けたい。

水野渚

アーティスト

目的もなく、ただひたすらに「あむ」。

費やされた時間と体力が、長さに比例する。

線が面となり、やがて重量のある塊となるにつれ、

「あむ」という行為に意味が生じはじめる。

手の中から、温度や匂い、リズム、呼吸、記録があみこまれていく。

今日も「あむ」。

明日も「あむ」。

ただひたすらに、日々「あむ」。

いつか「ほどく」。

あなたは「あむ」？

それとも「ほどく」？

「なにして遊ぶ？」

子どもの頃、誰かと遊ぶ時は「だいたい何時に、あそこで」と約束をするか、もしくは、その日、その場所にいるメンバーで過ごしていた。その中には、近所の馴染みの顔もいれば、年齢も学区も異なる見知らぬ子も含まれていたのだが、「なにして遊ぶ？」という言葉を合図になんとなく一緒に遊びはじめた。
学年や地域差により、同じ遊びでも名称やルールの違いが存在するので、情報共有をしつつ、メンバー構成や場所の特性により、その時だけの特別ルールや新たな遊びを開発していた。そこでは、いかに面白く、全員が楽しく過ごせるかが何よりも重要だった。

2021 年 8 月から始まったスタディでは、年齢や身体性や、感覚が異なるメンバーが集った。

毎回、日時と場所に加え、その日の概要は伝えられるものの「今日はなにが起きるのだろう」という期待感があり、気持ちも身体も温まった状態で帰路に着くこともあれば、その場で起きたことがスッと身体に落ちず、その違和感について数日間考え続けることもあった。

学びや気づきの多い「スタディ」ではあるけれども、私にとっては「遊び」と捉えるほうが、しっくりくる。共に同じ時間と場を過ごすことで、いつの間にか共有される感覚があることや関係性が発展してく様は、子どもの頃の遊び場に少し似ているように思えたからだ。

展覧会を行うにあたり、訪れるであろう「仮称・あなた」とどんな風に出会い、過ごすかを考えた。どうにか「遊び」に誘いたいものだ。ひとまず、私ひとりが過ごす時間に「あなた」の時間を加えてもらうルールを用意。会期の 3 日間、訪れた「あなた」の反応や場の展開にマイナーチェンジを繰り返しながら、遊び続ける。

少し気は早いけれど、次の遊びに向けたアップデートを考える一方、いつか自分の手を離れて、見知らぬ場所で、見知らぬ誰かの遊びとして続いていくのも面白いな、と思っていた。

さて、「あなた」と私が出会った時、「なにして遊ぶ？」

山田裕子
俳優、歩く人

いつもあたたかいわたしのて
そんな手が凍るとき
わたしと言葉が噛み合わない
触れてこどうを感じる
私ひとりぽっちかなぁ、、、
あなたのまなざしは
わたしの心をまた動かす
わたしは弱い、なさけない
1 人じゃなんにもできない。
あなたと向き合うことをもっとする。
わたしとあなたのペースで。

" だれかと（なにかと）向き合いたい "
が今、心の中にある？

少しテンションが強い糸があった。
手繰り寄せていく 7、8 月。ちょうど海にいた頃だ。

新しい世界だった。
異なる感覚世界をもつ方々とのコミュニケーション。
そこから学ぶ " 向き合い方 "

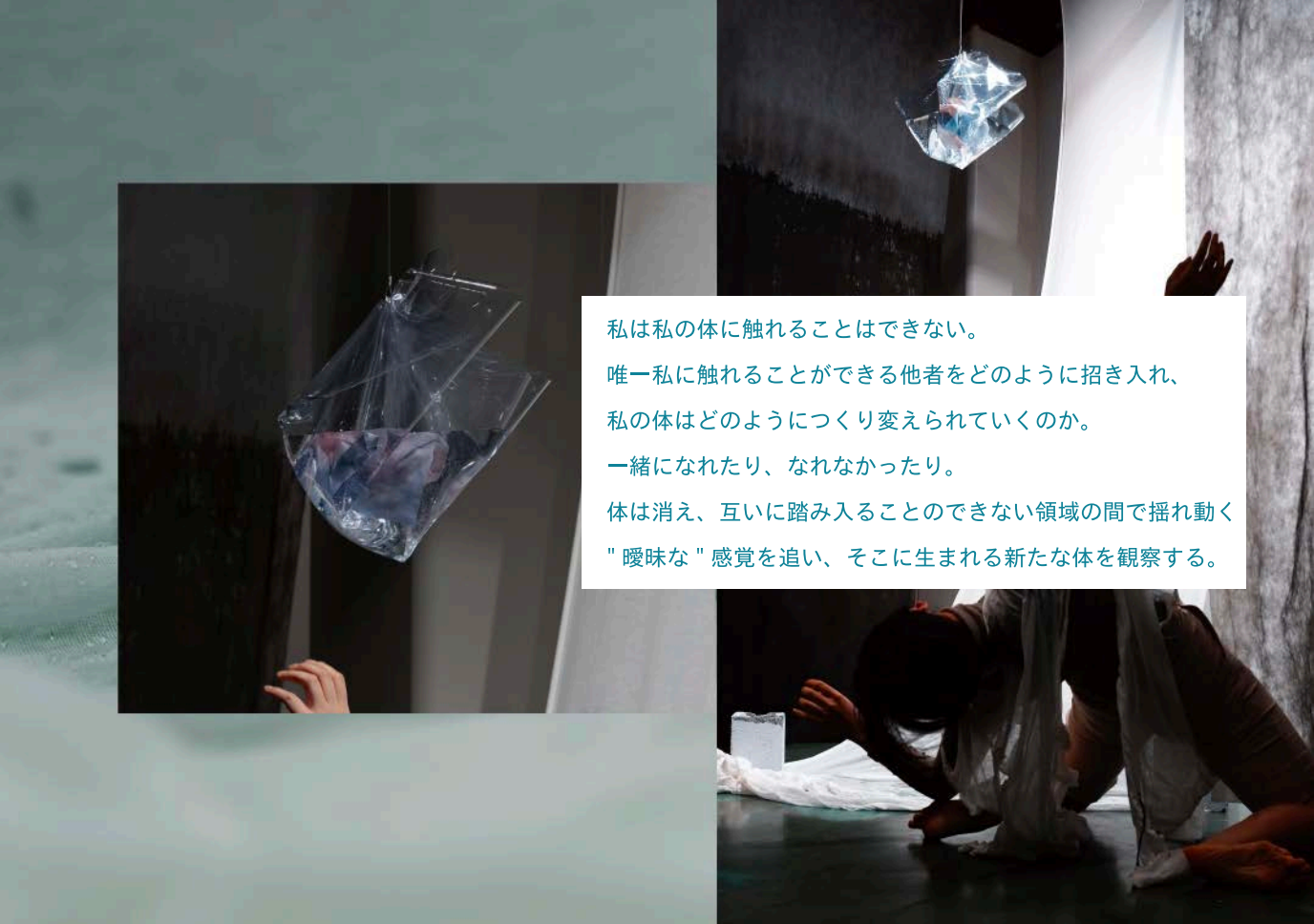
わたしから出る言葉、即興で喋ると相手を傷つけたり思っていないことが出てしまう。なんでかな。悔しい。
本当は見せたくなかった自分自身の恋への葛藤が
見えないことでポロッと出てしまった。やっぱりここにきてしまうんだなあ。

永遠と自分自身についてリサーチしていたはずなのに、表現に捉われすぎて自分を大事に出来ていなかったことに気づく。それってわたしと向き合いきれてないじゃんか。

うまく出来ないことが多いのは軽度知的障害からくる自分だった。何かの物差しでしかないけれど。
だからこそわたしにとっての、
聴く　見る　食べる　嗅ぐ　触る
はとっても大事でずっとそばにいてくれるきがする。素直で居られる気がする。何かが苦手でもまた何かがそれをフォローしてくれて、コミュニケーションができる。
可能にしてくれる。それって多分わたしのお友達関係なんだろうな
わたしが知らない分友達がわたしにたくさん教えてくれる。あぁ、そんな関係なんだろうなあ〜
だから今回の最終的に開いた形として、全部をぎゅぎゅっと詰めた体験に持っていこうと思った。

紡いでいくことが少し苦手ならゆっくりでいいよ、ゆっくりでいいよ、って温かい手で背中をさすってくれているようだった。
何をしたかはあまり覚えていない
ごっくんした身体が今のわたし。
これからも続くわたしと向き合うことについて
誰かと何かと向き合うことについて。

波多野彩姫



私は私の体に触れることはできない。

唯一私に触れることができる他者をどのように招き入れ、

私の体はどのようにつくり変えられていくのか。

一緒になれたり、なれなかったり。

体は消え、互いに踏み入ることのできない領域の間で揺れ動く

" 曖昧な " 感覚を追い、そこに生まれる新たな体を観察する。

あなた、と、わたし、の間に何を感じるか。

好き、嫌い、というと何か大切なものを切り捨ててしまう感覚になる。
わたしは選択することはあまり得意ではなく、
選択することによって失われる可能性がこぼれ落ちて、
それらを供養したいけれど供養しきれず、少しだけ悲しい気持ちになる。

あなた、と、わたし、の間にもそんな気持ちになることがある。
そこには、互いに踏み入ることのできない身体間で揺れ動く曖昧な感覚や時間があり、
わたしは、それを「それ」として大切に置いておきたい。

わたしは、身体を使った表現活動を続けていくなかで、
身体的なコミュニケーションやその身体間で起きていること、
他者との境界に興味があり、本スタディへの参加を決めた。

幼い頃から踊りに励み、表現する手段として身体を扱うようになり、
形を変えながら今も続けている。
踊りをしているというより、身体のなかに踊りが生まれる物語や、
踊りによって生まれる感覚、風景を求めているのだと思う。
そうしたときに、もっとフラットに身体やダンスとの関係を結び、
自身の身体表現への態度を再構築したいと感じながら、
「わたしの、あなたの、関わりをほぐす」をテーマとしてワークに取り組んだ。

あなたの身体は、わたしの身体は、
どのようにして関係を結んでいるのだろうか。
どのようにほぐれて、他者を招き入れているのだろうか。
どのように影響し、つくり変えられているのだろうか。
一緒になれたり、なれなかったり、どんな時間を積み重ねているのだろうか。

直接的に身体を介する「触れる」という関わりでなくとも、
あなた、と、わたし、は「触れる」ことができるのではないか。

本スタディでは、様々な形のあたたかな心を持った方々のお陰で、
日常のなか過ぎ去っていたものたちをもう一度大切に拾い集め、
これからの糧になる時間を過ごすことができた。心より感謝いたします。

これからもままならなさを抱きしめながら、そこにある曖昧な感覚を
追い、あなたとわたしの身体を信じて、身体からみえる風景を探して
いけたらと思う。

境佑梨

ダンサー、アーティスト

あなたにとって「居心地の良さ」とはどんなものですか？
また「居心地の良い場所」とはどんな場所ですか？
そこからはどんな「つながり」が生まれそうでしょうか？

大迫健司
踊る人、探す人、俳優

Column

「わたし」と「あなた」の起点。そこに、新たな関わりの回路が生まれる。

「つくること、つくりきるところまでいきたい」
これは、スタディ１をはじめようと、ナビゲーターのふたりとはやくから共有していた意向だった。ワークショップを体験し、ディスカッションを重ねて終わらせるのではなく、参加するメンバーそれぞれの感覚や身体を通り、生まれた気づきやまだなんとも掴みきれないモヤモヤを、とにかく、まずは自分自身と他者が触れられるかたちにしていくことが必要だと。頭の中にあるイメージを、身体が覚えている記憶を、「わたし」のまなざしを、自ら引き剥がして、この世界にそっと置く。そうすることで生まれる何か。

スタディ１は、異なる感覚を持つ他者と共在・共創するコミュニケーションの再考をテーマに、ナビゲーターと公募で集まった10人のメンバーが約半年間に渡って活動してきた。無意識と身体性、視覚優位な恋の翻訳方法、触覚のコミュニケーションなど、異なる感覚世界を持つゲストとともに身体と記憶をほぐすワークショップやことばと感覚にまつわるディスカッションを重ねる過程で、メンバーは自分の感覚や思考を改めて捉え直すだけでなく、思いがけない自分自身の反応や過去の経験と出会い直しているようにも見えた。
こうした経験を土台としながら、他者との「関わりをほぐす」新たな手法をつくることに取り組んだ。そして、その実験・実践のプロセスを『happening.』という３日間の展覧会のかたちで開いた。

悲しいことに、私は体調を崩して『happening.』に居合わせることができなかった。だから、オープン間もない展示会場をZoomでつないでもらったり、記録写真や動画から会場の様子を体感するほかなかった。発熱で火照った身体を横たえながら、会場の空気や人の気配、あの３日間に巻き起こったであろうhappeningを想った。それは、不思議な実感を伴うものだった。想像の中で、私はこんなふうに会場を眺めていた。

会場に入ると、緑色の床の上に黒い毛糸がぽろっと落ちている。毛だまりもあちらこちらに見える。さっき外の道でも見つけた。モフモフとしたその黒い毛糸をたくさん蓄えた人がいろんな人と話をしていて、ここで日々起こることを新聞にしている。会場入口すぐの壁には、白い糸がかかっていて、

その側には白い服をまとい佇んでいる人。彼女が声をかけてくれる。見える糸と見えない糸。振り返ると、ベッドに横たわって天井から吊るされたものを眺めている人。ふと大きなガラス扉をみると反転した文字が書かれている。あちらとこちら。相手の視点に自分を重ねていくこと。
天井から不織布があちこちに吊るされ、人が通る度にふわりと揺れている。不織布には山の稜線のような墨の跡。段々と重なって濃霧のような気配。空気の揺れ。
会場の真ん中あたりで、白い毛糸を編む人。その傍でほどきながら小さな毛糸玉をつくる人。編まれて大きな塊になった毛糸にはたくさんの半透明の薄い紙がついていて、その中から「左手のつけねがつりそう」と誰かの手書きの声がのぞく。ベンチに座りながら、壁にかかった白いキャンバスを眺めている人たち。そこには 5 つの枠にことばが重ねられていく。上書き短歌の風景。変容し続けるもの。
その隣には、天井からさまざまな素材の、でも同じ形をしたものが吊られている。木彫の痕跡の迫力。跡を指先でなぞる。焦茶色のビンと「何がきこえますか？」の問い。香りの音を聴く。匂いのリズム。反対側の壁際には、3 つの蚊帳のような白い空間。白色の布の隙間から水色と黄色と親密な空気が滲む。心の襞のようなやわらかなもの。
気づけば、詩を読む声が、あちらこちらから聞こえてくる。いろいろな話し声の中を、意思を宿した声と共に詩が漂う。会場の真ん中で、伸びやかな白い布と戯れる身体。ぐぅっとした重力と何かを受け取るように差し出される手と手。3 人の呼吸の応答。最後に、もう一度、詩が空間に満ちる。2 人の身体が詩と共に舞っていた。

つくりきることで立てる場所がある。その場所からしか見えない風景がある。そう信じて、スタディ 1 に伴走してきた。ここでいう「つくる」とは、道に小さな石をひとつ、そっと置くようなささやかな行為かもしれない。でもその小さな石は、「わたし」と「あなた」の関わりを結ぶ確かな「起点」となる。
『happening.』には、そうしたたくさんの「わたしの起点」が生まれていた（と思う）。そう信じられるこの実感をなんと呼べば良いのだろう。あの日、会場に居なかった私も確かに立ち会っていた。スタディ 1 で育まれた、新たな関わりの回路の芽吹きに。

嘉原妙
スタディマネージャー／アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー

おわりに

みんなに出会う前、小さくてもいいから変化を想像していると答えた。
ぼんやりと想像していた世界になればいいと願いを込めて。
手を引っ張られるように始まったスタディ１、“ナビゲーター”初めての単語と立ち位置に無数の“？”を抱えながら流れに身を任せた。
メンバーと共に走りながら、わからなくなることがしばしばだった。
うまく答えられず、苦しんだ。
人とほんとうの意味で向き合うというのはハッピーな感情だけではない。
関わりをほぐそうとしたり、造ったり、結んだり、時に傷つくこともある。
それは他者を知らないだけかもしれない。
異なる身体性や感覚を他者から感じたとき、それと向き合えるか。
どう向き合うのか。
最後まで関係を諦めず、相手と向き合い、わたしの好きな方法で、わたしという身体で。

見たかった景色は見られましたか？と聞かれたらわたしはどう答えるのだろうか。

様々なゲストと共に築いてきた経験を抱え、“happening.”をひらこう。
メンバーひとり一人の“ここ”にある、内面にある素敵なキラキラしたものを、ものとしてどう表現してもらえるか。ものを作る身体になってしまったわたしは、戻れなかった。
数えられるようなこの時間で、とてもむずかしいようにも思えた。
と同時に、メンバーのつくろうとしたものは、見ていい？と思うほどやわらかいものだったのだ。
少し恥ずかしそうで、はじめまして。みたいな空気をまとったものたち。
どこか懐かしく、儚い。
ひらくことが正解かはわからない、緩やかに失敗するかもしれない。
でもいいや。わたしもいま、そうだから。
ここで出会ったひとり一人の悩んだ言葉や表情は素敵だった。それははじめてメンバーひとり一人と画面越しに出会ったあの日みたいで、切実でまっすぐだった。

見たかった景色は、まだ、見れたと言わないでおこう。
始まる予感がした。
出会いによって自分の身体が変わり、世界が一変してみえる。
その希望を感じた。

そんなわたしは今日も始まったときの“？”を抱えてまた走り出します。
これをいま、読んでいるあなたが、どこかの誰かとほぐれますよう。

岡村成美
スタディ１ナビゲーター／Designer／Director／Costume Designer／Artist

おわりに

「ファッションには「流行」「慣習」という名詞のほかに、「形づくる」という動詞の意味があります。つまり、「自分を自分らしく形づくる」ということではないかと。」
（引用：「ファッションは更新できるのか？会議」DIY→DIWO→DIFO という時代に：田中浩也、成美弘至、水野祐、永井幸輔、金森香、水野大二郎：50p）

大学時代の恩師、水野大二郎先生の本をひらき、たまたま目に入ってきたこの言葉をみて、1 年間ともにナビゲーターとして並走してきた岡村成美さんのブランド、LOUD AIR についても想いを馳せながら、スタディを振り返っている。

コミュニケーションの反転、ほぐしあい、関わりの創発がしたい。
その先にあるのは、帰り道に石ころの見え方が変わる、そんなささやかなことだと思う。このスタディをはじめようとしたとき、まだ出会っていない誰かのことを考えながら、伝わるだろうか、ともどかしく感じながらも、まなざしたものはそんなことだった。

実際に始めてみると、ここに集う人々の純朴さと健やかさに救われ、思いがけない嬉しい happening がたくさん起こった日々だったと思う。
私自身の何よりも大きな発見は、３人のゲストとのワークと半年間の皆の身体が変容していく様が、『happening.』の場で拓いていったことだった。ひとりひとりの中にある関わりあいの矢印が相互に交わり、創発をうむ。柔軟で、開拓された身体と思考がその場で即興的に伝達の回路を創り出していく。
自分を自分らしく形づくることは、容易ではない。異なる他者を想像することもまた、容易ではない。けれども、他者と出会うことで自分の身体が変容し関わりもまた更新されていく。そうした日々、変容する身体がここにある、ということ。
2 年前、通訳や翻訳として誰かに自分の身体を貸し出すことで、日々透けていった私の身体は、このスタディという場を通して、あらためて私自身がここにいることを発見することができた。出会いを重ね、身体感覚の回路をひらき、人と向き合うことの熱や摩擦などから、少しずつ私が形づくられていくようだった。つくることを目指して実践を重ねたこの1年、ともに触れられるものが生まれ、他者との語らいによって、耕されていくものの存在を実感した。自分も相手も大切にする、そこから結び、拓かれていくものたち。

回路を拓き、新たにつくろうとすること。
それは決して容易なことではない。でも、その試行錯誤とともに、自らの身体を通して拓く「はじまり」の先に、みたことのない景色がある。
明日もまた、更新されゆく私とあなたへ期待を込めて。

和田夏実
スタディ１ナビゲーター／インタープリター

STUDY CARD

東京プロジェクトスタディ 1
わたしの、あなたの、関わりをほぐす ～共在・共創する新たな身体と思考を拓く～

happening.

著　　者　：　阿部健一、伊藤悠希、岡村成美、大迫健司、大塚拓海、木村和博、齋藤優衣、境佑梨、田中有加莉、二瓶雄太、波多野彩姫、水野渚、山田裕子、柳原実和、嘉原妙、和田夏実

編　　集　：　和田夏実、岡村成美、阿部健一、嘉原妙

デ ザ イ ン：　根岸桃子

写　　真　：　塚本倫子、Takuto Ohta

印刷・製本：　株式会社ショウエイ

発　行　日　令和 4 年 3 月 23 日

発　　行　公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073　東京都千代田区九段北 4-1-28 九段ファーストプレイス 8 階
Tel 03-6256-8435　Fax 03-6256-8829
https://www.artscouncil-tokyo.jp

ISBN　978-4-909894-33-5　C0070

※本冊子は Tokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」の一環として制作されました。
Tokyo Art Research Lab(TARL) とは
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京の人材育成事業として、アートプロジェクトを実践するすべての人々に開かれ、ともにつくりあげるリサーチプログラムです。現場の課題に対応したスキルの提供や開発、人材の育成を行うことから、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指しています。
https://tarl.jp

tarl TOKYO ART RESEARCH LAB

ARTS COUNCIL TOKYO